氏　　名　栁沢貴司（やなぎさわ たかし）
学位(専攻分野)　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第44号
学位授与の日付　平成10年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目　キェルケゴールの宗教哲学
——「キリスト者に成る」という問題を中心にして——

論文調査委員　（主査）教授 有福孝岳　教授 安井邦夫　教授 小川　侃

論文内容の要旨

『キェルケゴールの宗教哲学——「キリスト者に成る」という問題を中心にして——』と題されたこの論文では，キェルケゴールにとって中心問題であった「キリスト者に成る」という問題が解明される。キェルケゴールは，キリスト者に成ることが人間にとっての最高の課題であると考えたが，それはなぜなのか，という理由と根拠が究明されるのである。現代においては宗教と社会の対立，諸宗教間，諸宗派間の対立が世界中で様々な問題を引き起こしている。そしてそれにともなって宗教一般に対する不信が広まっている。こうした状況にあっては，既成宗教たるキリスト教に関しても，「なぜキリスト教か」ということが根本的に問いなおされねばならない，ということが本論の問いの背景をなしている。

第1章「『不安の概念』の宗教性」では，まず『不安の概念』における「キリスト者に成る」という問題が考察される。『後書』によるならば，キリスト者に成るためには，人は宗教性Aと呼ばれる一般的宗教性を経由しつつ，これを脱してキリスト教（宗教性B）へと到達するのでなければならない。しかし，本章では，『不安の概念』における「罪意識」，「信仰」，「瞬間」といった概念を分析することによって，『不安の概念』が根本的に宗教性Aの内に留まっていることが明らかにされる。『不安の概念』では，宗教性Bへの移行として理解されるべき「キリスト者に成る」という問題に関しては答えられていない，ということがこの章での結論である。

第2章「『死に至る病』における絶望と信仰」では，「キリスト者に成る」という問題が，『死に至る病』に即して考察される。ちなみに，『死に至る病』では，絶望を克服するために，人はキリスト者に成るべきである，ということが主張される。本章では，『死に至る病』における「絶望」概念を検討することによって，その「絶望」自体がはじめから「信仰」の反対として規定されていることが明らかにされる。したがって，『死に至る病』では，「なぜキリスト教でなければならないのか」という問題は答えられていない，という解釈が展開されるのである。

第3章以降は新たに『後書』を中心にして議論が進められている。

キェルケゴールによれば，キリスト者に成るためには，人は倫理的段階から宗教性Aを通過していかなければならない。「倫理的段階と宗教性A」と題された第3章での問題は，この倫理的段階から宗教性Aへの移行が，なぜなされねばならないのか，ということである。そしてこれに対する答えは，その移行は「主体化の倫理」によって要求される，ということである。「主体化の倫理」とはすなわち，自己意識を実存のうちに浸透させ，自己の連続性を形成することを課題とするものであると考えられるが，そのような倫理こそが，実存する人間にとっての真の倫理である，というのがキェルケゴールの主張である。以上が第3章の骨子である。

第4章では，宗教性Aからキリスト教への移行について論じられる。この移行に関して問題となってくるのは，キェルケゴールがキリスト教を「逆説」として規定していることである。「逆説と悟性」と題される第4章では，この「逆説」，「神人」の「逆説」を信じることは非合理なことであるか，ということが問題とされる。しばしばキェルケゴールは非合理主義者であると解釈されるが，そのような解釈では，「キリスト者に成る」ことが宗教性Aからの移行であることが度外視され

ている。宗教性Aからの移行として正しく理解されるならば，「逆説」を信じることは，「躓きを破棄する」こととして，まったく合理的な選択であることになる。

第5章「疑惑と信仰」では，「疑惑」との関係から信仰が考察され，信仰とはどのようなものであるのか，ということが明らかにされる。通常信仰は，疑惑の反対として規定される。けれどもキェルケゴールにおいては，信仰は単に疑惑の反対としてのみならず，「疑惑の持続」としても考えられている。「疑惑」を生涯持続することが，「疑惑」を克服する「信仰」である，と考えられるのである。

第6章「第二倫理」では，第5章で「疑惑の持続」として解明された信仰が，なぜ意志されねばならないのか，ということが問題とされる。これはつまり信仰者であり続けることが，何故意志されねばならないのか，ということでもある。そしてそれは，「罪人」としての自己の連続性を課題とする倫理，つまり新たな「主体化の倫理」（「第二倫理」）によって要求されるのだ，というのが本章での結論である。

最後の第7章「アンチ・クリマクスとヨハネス・クリマクス」では，第2章で取り上げられた『死に至る病』の仮名著者アンチ・クリマクスの立場と『断片』，『後書』の仮名著者ヨハネス・クリマクスの立場が考察され，それによって，これまでの本論での解釈が正当なものであったことが裏づけられる。

このように，本論を貫く根本的問い「人はなぜキリスト者に成らねばならないか」が，神学的にキリスト教の真理性を前提することを徹底的に回避する仕方で，哲学的思想的に，ならびに主体的実存的に，しかも「非合理的」にではなく，「合理的」論理的に解明されたところに，本論の独自性と独創性が存している。

論文審査の結果の要旨

キェルケゴールの思想を研究対象とする場合，そのキリスト教的な性格をどう取り扱うか，ということは重大な問題である。キェルケゴールの思想は，一方において，実存主義を生み出し，サルトルを始めとする無神論的実存主義の源流となった。しかし，また他方において，それは，弁証法神学を生み出し，バルト神学の超自然主義へと結実していった。キェルケゴール解釈においても，基本的にはこれと同じような動向を見出すことができる。一方においては，そのキリスト教的性格をできるかぎり排除していく仕方で，他方においては，そのキリスト教的性格を絶対的なものと見なしていく仕方で，解釈がなされるのである。けれども，両者のいずれの解釈も大きな問題を孕んでいる。前者の場合は，「キリスト者に成る」ことを中心問題としたキェルケゴールの思想を歪曲することになりかねないし，後者の場合は，そうした「神学的」思想が果たして非キリスト教徒にとっても意味を持ちうるのか，という根本的問題に突き当たらざるを得ないのである。

本論文の独自性は，これらのどちらの解釈にも与することなく，非キリスト教徒にとってのキェルケゴール思想の有意義性を，キェルケゴール自身の論述から導出しようとする点にある。申請者によれば，「キリスト者に成る」という問題は，何よりも非キリスト者にとっての問題であり，非キリスト者のキリスト教に対する関係こそが，キェルケゴールの思想の核心をなしている。そのかぎりにおいて，キェルケゴールの思想は，非キリスト教徒にとっても無視しえないものとして，キリスト教と人間存在の関係についての根本洞察を含んでいると考えられるのである。ただし，そこで問題になってくるのは，その洞察がどれだけ論理的，哲学的思惟に耐えうるものであるか，ということである。

したがって，本論文では，「キリスト者に成る」ことに関するキェルケゴールの論理を，キェルケゴール自身の論述から再構成し，吟味していく，という作業が行われることになる。第1章，第2章では，『不安の概念』，『死に至る病』の論述が検討され，それらの書物では，「キリスト者に成る」ことに関しての論述が論理性を欠いていることが明らかにされる。そしてそれによって，以後，『断片』，『後書』を中心にして議論を構成すべきことが示唆される。第3章では，倫理的段階から宗教性Aへの移行が取り上げられ，それが，自己意識の徹底と自己の連続性を要求する「主体化の倫理」によって説明されうるものであることが明らかにされる。第4章では，キェルケゴールによって，キリスト教の「神人」は「逆説」と規定されるにもかかわらず，それに対する信仰は，「躓きを破棄するために」ということで論理的に正当化されうることが証示される。第5章，第6章では，キェルケゴールにおいては信仰を持続することは，罪意識の持続として，「矛盾」と規定されるにもかかわらず，それが，「第二倫理」ということで正当化されうることが証示される。

申請者は，このような作業を通じて，しばしば非合理主義と解されるキェルケゴールの思想に内在する論理を合理的に解

き明かすのである。そしてまたそれによって，キェルケゴールの思想が単なる「神学的」思想ではなくして，人間存在とキリスト教の関係についての哲学的，ないしは宗教哲学的な思想であることを明らかにするのである。この点が，申請者のキェルケゴール解釈の独創性と独自性を形成している。なお，本論文のように，『後書』を中心にしてキェルケゴール解釈を展開する場合，それがいかなる条件において客観的普遍的意味をもちうるかという問題がある。ちなみに，キェルケゴールの作品には，仮名著作，本名著作，日誌遺稿の三種類があり，これら三種類の作品はそもそもどのような関わり合いのうちにあるのかという問題も無視できない。また，『不安の概念』や『死に至る病』における「不安」「自己」「逆説」などについての分析が，後にハイデッガー，サルトル，西田幾多郎といった哲学者達に深い影響を与えたとしばしば言われているが，申請者は，本論文では，「キリスト者に成る」という問題に焦点を絞ることによって，これらの著作に敢えて消極的評価を与えている。しかし，まさしくこのことを通じて，申請者はキェルケゴール解釈における新たな独自の視点を切り開くことに成功したのである。

このように，本論文は，「キリスト者に成る」という問題を中心にして，キェルケゴールにおける人間存在とキリスト教との根源的関係を，キリスト教的神学的観点からではなく，宗教哲学的・実存思想的観点から，しかも「合理的」論理的手法によって解明したものとして，キェルケゴール研究に少なからず寄与しており，また人間・環境学研究科の基本理念並びに人間形成論講座の研究方針にも合致している。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成10年１月30日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。